



Title	中国出身学生による教育のための越境移動——国内移動と留学の接続——
Author(s)	新井, 凜子
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105395
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (新井 凜子)

論文題名 中国出身学生による教育のための越境移動 ――国内移動と留学の接続――

論文内容の要旨

本研究は、教育のための越境移動について、中国出身学生を対象に、フォーカス・グループおよびライフストーリーという2つの質的手法を用いて調査する。これまで留学生に関する研究では、国内移動と国際移動とが別々に論じられる傾向があったが、本研究では、中国出身学生の教育のための越境移動について、日本への留学を軸に、留学に至る前の国内移動の段階から併せて検討する。また、従来の研究ではあまり注目されてこなかった農村出身者に焦点を当てた分析を行う。

中国出身学生はどのような社会的背景から留学を選択するのだろうか。また留学をどのように捉えているのだろうか。国内の激しい競争を背景に「内卷」や「潤」が頻繁に語られ、かつ「奮闘する自己」が求められる中、留学は「生存圧力」からの離脱の手段として捉えられていた。一方、「奮闘」が必要であるがゆえに、留学というリスクをとることを避け、留学をしないという留学未経験者の語りもみられた。留学は規範的なライフコースから「逃げる」ことと、一時的な逃避を通じて「出口を探す」ことが重なる行為ともなっている。

参加者の間で日本は、欧米圏を頂点とする主要留学先の「ヒエラルキー」において「中の下」と評価されつつも、学費や生活費の低さから、費用対効果の高い「金の含有量」の大きい目的地として位置づけられていた。

では中国出身学生はなぜ日本を留学先として選択し、どのように日本に至るのだろうか。ライフストーリーの語りからは、日本語や日本文化への関心のみならず、国内の激しい教育競争からの離脱、自立や成長の実現、家族やジェンダー規範から距離を取ることによる主体性の獲得といった、実存的動機が多く浮かび上がった。日本と中国の地理的近接性は、「行き来しながら生きる」という越境的生活の構想を可能にし、参加者はこうした移動性を利用して家族関係や規範的なライフコースと交渉していた。

農村出身者の経験からは、義務教育段階からより大きな行政単位へと移っていく＜不随意＞な移動が繰り返されており、教育資源の都市集中や戸籍制度といった制度・構造への＜依存＞が移動の道程を形成していることが明らかになった。大学進学を経て初めて留学可能性を具体的に認識し、授業料免除、奨学金、アルバイト収入を組み合わせることで国際移動が実現していた。一方で、農村出身者以外でも、日本語専攻への偶然の振り分けなど、人生の特定の局面で生じる＜偶発＞的契機が留学への道を開くことも確認された。中国出身学生の日本留学には、制度・構造への＜依存＞と機会の＜偶発＞性が重なって展開する＜依存―偶発＞性があるのである。

中国出身学生の教育のための移動をめぐる実際の経験をより継ぎ目なく反映した議論の発展には、国内移動と国際移動とを結びつけて論じることが重要であることが示された。

“Cross-Border Educational Mobility of Chinese Students: Intersecting Internal Migration and Study Abroad”
This study examines cross-border educational mobility among students from China, drawing on focus groups and life-story interviews. Rather than treating internal and transnational migration as separate processes, it situates mobility to Japan within a longer trajectory that includes prior stages of internal migration, while foregrounding students from rural backgrounds whose experiences have received limited scholarly attention.

What social conditions shape Chinese students’ decisions to study abroad, and how do they interpret its meaning? In the context of intense domestic competition and strong expectations of continuous self-striving, studying abroad was frequently framed as a way to disengage from pervasive “survival pressure.” At the same time, because striving and risk-taking are socially valued, some participants without overseas experience

described consciously avoiding the risks associated with transnational mobility. Overseas study thus emerges both as an attempt to “escape” normative life-course trajectories and as a temporary retreat through which students search for an “exit” toward alternative futures. Within participants’ narratives, Japan was positioned in a perceived hierarchy of study destinations (*bishilian*)—often imagined with Western countries at the apex—as middle-to-lower tier. Nevertheless, due to comparatively low tuition and living costs, Japan was evaluated as a destination with high “gold content” (*hanjinliang*) and strong cost-performance value.

Life-story interviews show that decisions to study in Japan were shaped not only by instrumental motivations, such as interest in the Japanese language and culture, but also by existential aspirations: distancing oneself from intense domestic competition, pursuing independence and self-development, and gaining agency by negotiating family expectations and gender norms. Japan’s geographical proximity to China enabled the imagination of a cross-border life lived “back and forth,” allowing participants to manage distance and closeness in relation to family and normative life-course expectations.

For participants from rural backgrounds, educational trajectories involved repeated episodes of “involuntary” moves to larger administrative units from compulsory education onward. These pathways were shaped by dependence on institutional and structural arrangements, including the urban concentration of educational resources and the household registration system. For many, the possibility of studying abroad became tangible only after university entry and was realised through tuition waivers, scholarships, and part-time employment. Contingent moments—such as being assigned by chance to a Japanese-language major—also opened pathways to Japan. Educational mobility thus unfolds through a dynamic of “dependence—contingency,” where structural dependence and contingent opportunities intersect. By linking internal and transnational migration, this study highlights educational mobility as a continuous and interconnected process.

《中国大陆学生的教育跨境流动：国内迁移与留学的衔接》

本研究以中国大陆学生为对象，运用小组访谈与生活故事访谈两种质性研究方法，探讨以教育为目的的跨境流动性。既有关于留学生的研究往往将国内迁移与国际迁移分开讨论，而本研究则以赴日留学为中心，将其置于更长的流动轨迹之中，结合留学之前的国内迁移阶段加以考察。同时，本文聚焦以往研究中较少受到关注的农村出身学生，展开分析。

中国学生是在怎样的社会背景下选择留学？他们又如何理解留学的意义？在国内激烈竞争的背景下，“内卷”“润”等话语频繁出现，为自我发展与社会进步而“奋斗”被不断强调。在这样的语境中，留学常被视为摆脱“生存压力”的一种方式。然而，正因为“奋斗”被视为必要前提，一些没有留学经历的受访者也提到，为避免承担留学所带来的风险而选择不出国。由此，留学既是对规范性人生轨道的“逃离”，也是通过暂时性抽离来“寻找出路”的实践。

在受访者的叙述中，日本在以欧美为顶端的主要留学目的地“鄙视链”中被评价为中下位。但由于学费和生活成本相对较低，日本同时被视为“含金量”较高、性价比突出的留学目的地。

中国学生为何选择日本，又是如何走向日本的？生活故事访谈显示，除了对日语及日本文化的兴趣之外，还浮现出诸多存在性动机，例如摆脱国内激烈的教育竞争，实现独立与自我成长，通过与家庭及性别规范保持距离来获得主体性。中日之间的地理接近性，使“往返式生活”的跨境构想成为可能，受访者借助这种流动性，与家庭关系及规范性人生路径进行协商。

来自农村学生的经历显示，从义务教育阶段开始，便不断经历向更高一级行政单位流动的<不随意>迁移，其流动路径深受城乡教育资源差距以及户籍制度等制度与结构性因素的制约。对农村学生而言，直到进入大学后才真正意识到留学的可能性，并通过学费减免、奖学金与兼职收入的结合，实现国际流动性。同时，即便是非农村出身者，也可能因被偶然调剂至日语专业等<偶发>性契机而开启留学路径。因此，中国大陆学生赴日留学呈现出制度与结构性<依存>与机会及移动路径之<偶发>性相互交织的<依存—偶发>性。

本研究指出，要更为连贯地反映中国学生以教育为目的的流动经验，有必要将国内迁移与国际迁移结合起来加以分析，而非将其视为彼此割裂的过程。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (新 井 凜 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	大谷 順子
	副 査	教授	石川 真由美
	副 査	教授	園山 大祐
	副 査	教授	モハーチ ゲルゲイ
論文審査の結果の要旨 本論文は、留学を含む教育のための越境移動について、中国出身学生を対象に、フォーカス・グループおよびライフストーリーという2つの質的手法を用いて調査、分析を行ったものである。本研究は、社会学、教育学、文化人類学の知見を用いて、移民研究、留学生研究、モビリティーズ・スタディーズの視点から、日本への留学を軸に、中国出身学生の移動を留学に至る前の国内移動の段階から併せて検討している。また、従来の研究ではあまり注目されてこなかった農村出身者に焦点を当てた分析を行っており、中国の教育移民について詳細に探求している。 第1章および第2章では、研究の背景を整理した上で、研究目的および研究設問を提示し、先行研究をまとめている。第3章では、研究方法について論じている。2つの質的インタビュー法を用いて、日本および中国で調査を行っている。併せて、研究者自身の立場性や、外国人／日本人という属性が調査に与えた影響、さらには中国を研究することに関する困難や留意点について検討している。第4章では、主にフォーカス・グループのデータを基に、中国出身学生が留学という選択肢に向かう社会的背景を整理し、参加者が繰り返し用いるキーワードを手がかりに、留学がどのように想像されているのかを明らかにしている。また、日本を含む主要留学先の「ヒエラルキー」や「金の含有量」といった評価について検討し、さらに、留学未経験者を参加者に含むインタビューから、留学のイメージ、愛国心との関係、そして「人生の出口」としての留学について論じている。第5章では、日本に留学した学生の経験に焦点を当て、日本に至った経緯を主にライフストーリーから分析している。個々の語りに表れる偶発的・実存的な移動の経緯、欧米留学を経由して日本に到達した参加者の移動の道程について検討し、また、日本留学の経済的条件や実際に直面する障壁についても分析している。第6章では、中国農村部出身の参加者に着目し、義務教育段階から大学進学に至るまでの国内移動の過程を検討することで、農村地域から都市部への＜不随意＞な移動がどのように教育機会を左右しているのかを、複数の語りを通じて描写している。さらに、その先に留学がどのように位置づけられるか、留学後の進路選択やその後の移動についても分析し、農村出身者の空間的・社会的モビリティの複層性を検討している。第7章では、本論文の中心的論点を再提示した上で結論を示し、本研究の限界を整理するとともに、今後の研究に向けた課題と展望を提示している。 本論文は、中国出身学生の留学を、国際移動として単独に捉えるのではなく、留学以前の国内移動と連続させて分析することで、移動の選択が道具的合理性だけでなく、実存的動機や、ジェンダーや年齢に紐づく社会規範との交渉の中で形成されていることを明らかにした。また、複数の手法を用いて日本と中国にて調査を実施しており、独自性が高い。農村出身者に着目することで、教育のための移動が計画的戦略というよりも、制度・構造への依存と偶然の機会が重なり合う＜依存－偶発＞的プロセスとして展開していることを明らかにした点で、学術的意義は大きい。 総じて、本論文は学術性と実用性を備えており、博士（人間科学）の学位授与に相応しい研究成果であると判断する。			